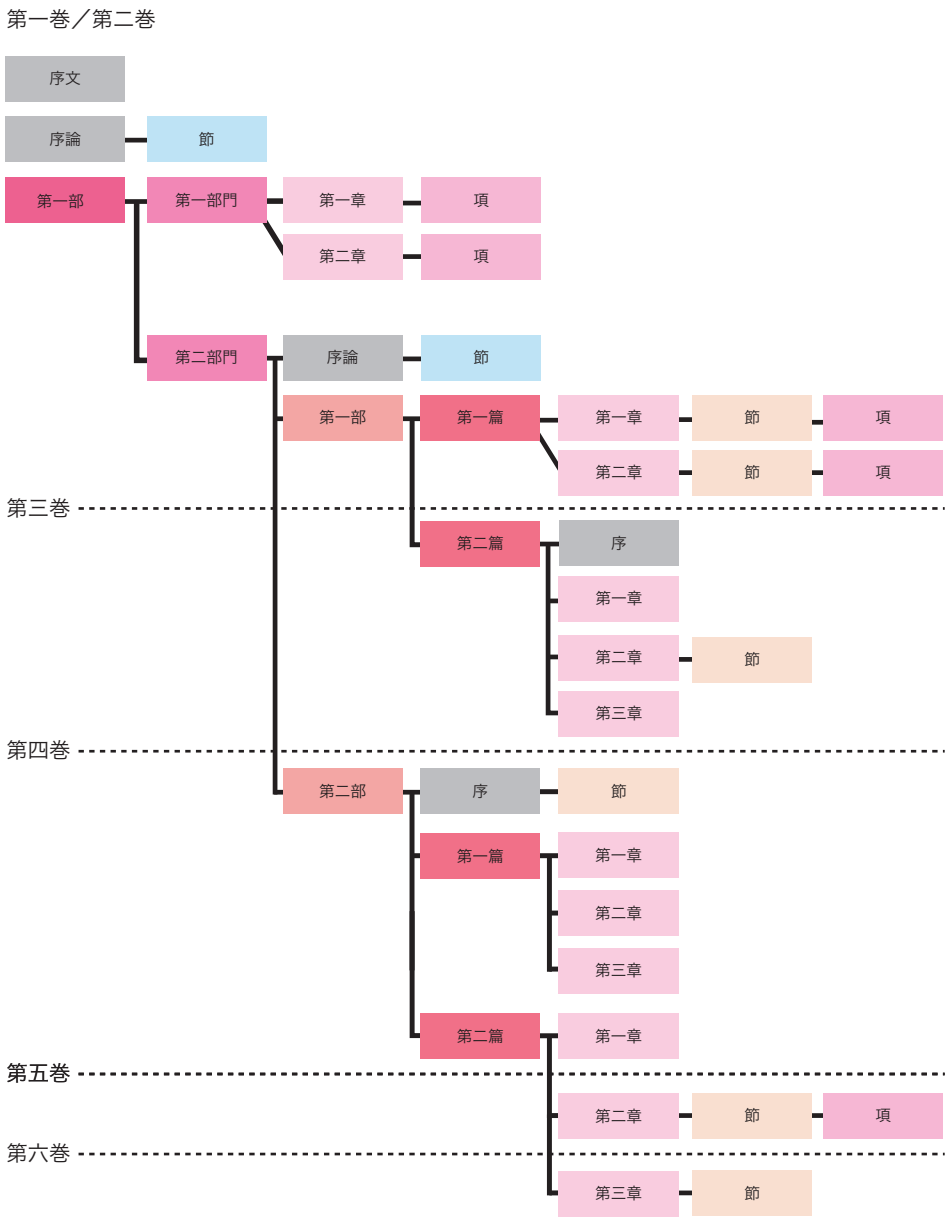
『純粋理性批判』カント／中山 元・訳

タイトル・リスト 5　第六巻　[2011.09.20]



n=原注

第六巻

第一部　超越論的な原理論

第二部門　超越論的な論理学

第二部門の第二部　超越論的な弁証論

第二篇　純粋理性の弁証論的な推論について

第三章　純粋理性の理想

第一節　理想一般について

658　カテゴリーと理念における客観的な実在性の欠如

659　理想における客観的な実在性の欠如

660　完璧な人間の理想

661　完璧な人間の理念と理想

662　理性の理想と感性の理想

663　理性の理想の意図

第二節　超越論的な理想（超越論的な原型）について

664　規定可能性の原則

665　〈あまねき規定性〉の原則

665n　可能性の総体

666　あまねき規定という概念

667　〈原概念〉としての〈すべての可能性の総体〉の理念

668　論理的な否定と超越論的な否定

669　派生的な概念としての否定

669n　無知の深淵

670　実在性の全体の理念

671　〈もっとも実在的な存在者〉という理想

672　超越論的な理想の原理と超越論的な理念

673　原型としての理想

674　最高の実在者の三つの呼び名

675　単純なもの

676　物の〈根拠〉としての根源的な存在者

677　超越論的な意味での〈神〉

678　虚構の実体化

679　最高の実在性についての問い

680　経験的な原理についての自然な錯覚

681　超越論的な詐取

681n　理想の実在化、実体化、人格化のプロセス

第三節　思索を営む理性が、最高の存在者の現存を推論する証明根拠について

682　理性の土台としての無条件的なものの理念

683　根源的な存在者にいたる論拠

684　無条件的に必然的な存在者にいたる推論

685　無条件的な存在者に必要な特徴

686　無条件的に必然的な存在者の概念をもっとも満たす概念

687　理性の自然な進みゆき

688　決定の選択肢

689　制約された存在者と絶対的に必然的な存在者

690　理性の実践的な動機

691　最高原因と一神教

思索を営む理性によって神の現実存在を証明するための三種類の方法

692　三種類の神の存在証明

693　証明の順序

第四節　神の現実存在についての存在論的な証明が不可能であることについて

694　知性の矛盾

695　「無条件的なもの」という概念への疑問

696　「無条件的なもの」という概念への省察の欠如

697　概念から存在への推論

698　分析的な命題の必然性とその限界

699　絶対的に必然的な主語――矛盾と不可能性

700　〈もっとも実在的な存在者〉という概念による反論

700n　論理的な可能性と実在的な可能性の違い

701　哀れなトートロジー

702　論理的な分析命題と事物を規定する総合命題の違い

703　「ある」は実在的な述語ではない

704　「存在する」という述語の効果

705　経験の領域の外部での〈現存〉の可能性

706　最高の存在者の理念

707　神の存在論的な証明の挫折

n=原注

第六巻

第五節　神の現実存在についての宇宙論的な証明が不可能であることについて

708　理性の二つの要求
709　存在論的な証明と宇宙論的な証明の違い
710　宇宙論的な証明の呼び名について――存在論的な証明や自然神学的な証明との違い
710n　因果関係の終端
711　もっとも実在的な存在者による証明
712　宇宙論的な証明のごまかし
713　推論の欺瞞を暴く
714　宇宙論的な証明のごまかし
715　宇宙論的な証明の誤謬
716　詭弁の巣窟
717　四つの誤謬推論
718　宇宙論的な証明の不可能性の証明
719　宇宙論的な証明の越権
720　超越論的な理想の課題
721　理性の深淵
722　理想の占める場所

必然的な存在者が現実存在するというすべての超越論的な証明に含まれる弁証論的な仮象の発見と説明

723　超越論的な証明における仮象の原因
724　宇宙論的な証明の背後にある推論
725　必然性の原則と偶然性の原則
726　絶対的に必然的なものは世界のうちには存在できない
727　物質は〈絶対に必然的な存在者〉ではない
728　超越論的な虚偽の避けがたさ

第六節　自然神学的な証明が不可能であることについて

729　自然神学的な証明とは
730　自然神学的な証明の不可能性
731　最高の存在者にいたる〈橋〉
732　最高の存在者の要請
733　自然神学的な証明と自然研究
734　自然神学的な証明の恩恵
735　自然神学的な証明の欠陥
736　自然神学的な証明の四つの段階
737　自然神学の証明のメカニズム
738　自然神学的な証明の限界――世界建築者の存在証明にすぎない
739　自然神学的な証明の欠陥
740　この欠陥の根拠
741　自然神学的な証明の不可能性
742　自然神学的な証明と存在論的な証明
743　自然神学者たちの失敗
744　存在論的な証明の優位

第七節　理性の思弁的な原理によって行われるすべての神学の批判

745　神学の分類
746　超越論的な神学の二つの道
747　自然的な神学の二つの道
747n　道徳的な神学と神学的な道徳の違い
748　理神論と有神論の違い
749　理論的な認識と実践的な認識の定義とその違い
750　理論的な認識における絶対的な必然性の認識
751　思索に基づく認識と自然的な認識
752　思索に基づく認識の〈濫用〉
753　原因性の原則の濫用
754　ふたたび自然神学的な証明の無効性について
755　まとめ
756　神の存在についての問い
757　思索を営む理性の利用の効用
758　超越論的な神学の効用
759　完璧な理想としての神

n=原注

第六巻

付録　超越論的弁証論

#760~#822

純粋理性の理念の統制的な使用について

760　理性の自然な傾向
761　理念の二つの使用方法
762　対象にかんする知性と理性の役割
763　虚焦点としての理念――理念の統制的な使用について
764　理性の目的
765　理性の確定的な使用と仮説的な使用
766　理性の仮説的な使用の目的
767　認識の統一の機能
768　理性の超越論的な原則の役割
769　根源的な力の理念の導出の手続き
770　根源的な力の仮説の目的
771　統一の試みの必然性
772　自然の体系的な統一を裏づける超越論的な原理の必要性
773　概念の体系と生物体系の類比
774　自然における統一の試み
775　類の原理の必然性
776　類の原理と種の原理
777　下降の方法と上昇の方法
778　種化の法則の意味
779　人間の認識の条件としての同種性と多様性
780　理性の三つの原理
781　地平の概念
782　種についての二つの原則
783　三つの法則の役割
784　自然解釈の論理的な法則と自然の客観的な法則
785　形式の連続性の概念が経験に適用できない理由
786　天体の軌道の実例
787　この原理の二面性
788　純粋理性の原理の統制的な使用の意味
789　感性の図式の類似物としての理性の理念
790　理性の主観的な原理
791　統制的な原則と主観的な原理
792　主観的な原理の応用
793　主観的な原理としての親和性の原則

人間の理性に固有の自然の弁証論の究極の意図について

794　理念の使命
795　理念の根拠づけの課題
796　理念の客観的な実在性と図式
797　この原理の三つの課題
798　宇宙論的な理念の問題点
799　観念的な存在者の性格
800　理神論的な神の概念
801　神の存在と人間の理性の関係
802　自立した理性
803　最高の存在者の位置
804　曖昧な原理
805　理性的な存在者の二義性
806　理性的な存在者の理念の〈使い道〉
807　心という実体の理念が理性にたいしてもつ意味
808　世界概念の理念が理性にたいしてもつ意味
809　神の理念が理性にたいしてもつ意味
810　神の理念のもたらす〈恩恵〉
810n　地球が長球形であることの利益
811　理性の眩暈
812　理念の誤用の第一の誤謬――理性の怠慢
812n　「理性の怠慢」という名称について
813　理念の誤用の第二の誤謬――理性の倒錯
814　自然研究の目的
815　理性の〈学校〉
816　理性の本性への問い
817　超越論的な神学への三つの問いと答え

n=原注

第六巻

817n　心理学的な理念にまつわる幻想の批判の手続き
818　世界創造者の存在についての問い
819　最高の存在者と自然研究の方法
820　神と自然
821　永遠の論争の原因
822　思索を営む理性の訴訟